目一杯の祝福を君に

オミヤマ　オクタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもオリ主が崩壊スターレイルの世界に転生したらという話です。

作者はにわかです。

目　次

君は遥か遠くに浮かぶ星 ―― 1
君は思い眠りにつく ―― 4

君は遥か遠くに浮かぶ星

■

死んだ時の記憶はない。

目が覚めたら僕は白い変な空間にいた。そこにいた神様が言うには俺は転生するらしい。転生する世界は崩壊スターレイル？らしい。自分はやったことのないゲームだが、友達が異様に進めていたからやってみようとは思っていたんだが・・・

唯一の心残りは彼女なし童帝で死んだことだ・・・ せめて1回くるいは、彼女が欲しかった。ただこれから受験勉強しなくていいと考えるとまぁいいかなって思ってしまう。

さて転生した先は、「存護の町」ベロブルグだこの町は雪が降っているのに凍えるほどでは無い、でも十分に寒いんだけどね。

僕が転生した先の家族は酷かった毎日お母さんとお父さんが喧嘩していて、お母さんからは虐待を受けていた。小さい頃から話せたり大人でも知らないようなことを言っていたから不気味にでも思っていたのだろう。それかただのストレスを発散するための道具だったのか分からないが・・・。

命の危険を感じ家から逃げてきたのだが、行くあてもなく2日間ほどさまよっていたら倒れてしまって起きたらベットの上にいた。周りを見渡すと白髪の可愛い6歳くらいの女の子がいた。女の子は起きた僕に驚いたのか目を見開くと、直ぐにドアを開け別の部屋に言ってしまった。すぐに白髪の女の子が女性を連れてきた。僕は拾ってくれた事を感謝しようとしたのだが、何故か声が出なかった。

「お母さん、もしかしてお腹がすいているんじゃないかな？」

「そうかもしれないわね、とりあえずご飯にしましょうか。」

「すぐにご飯を持って来るから待っててね！」

女の子と女性はパタパタと言ってしまった。女の子だけ戻ってきた。手にスープはらしきものを持っている。

「これはねスープだよ！お母さんのスープはとても美味しいんだよ

！」
女の子は元気いっぱいにそう言うと僕の隣に椅子を置いて座った。
「私が食べさせてあげるね、暑いから、ふーっふーっ、よし！あ～ん」
「……　美味しい」
スープで喉が潤ったおかげか喋ることが出来た。
「！　でしょ！」
「とっても美味しいよありがとう。」
「エへへ　どういたしまして！」

「ご馳走様。とても美味しかったよありがとう。」
「そういえば名前はなんて言うの？」
「私はクラーラだよ。あなたは？」
クラーラに言われて僕はいままで名前で呼ばれたことにないことに気づいた。お母さんからはおまえとしか言われたことしか無かった。名前か…　僕は前世の名前から今世の名前はオクタに決めた。
「僕の名前はオクタだよ。よろしくクラーラ」
「オクタ君よろしくね！」

「お母さん！私、オクタくんと一緒にいたい。良いでしょお母さん？」
「そうは言っても、オクタくん自身が決めたことだからねぇ」
あの後僕はいつでも厄介になるのは申し訳ないと思い。クラーラと、クラーラのお母さんに現状と家を出ることを伝えた。しかしクラーラが一緒に住もうと言ってきたのだ。
「クラーラ、家は、君のお母さんが住み込みの仕事を用意してくれるんだ。だから僕は大丈夫だよ。」
「…」
「すぐにまた来るからさ」
「クラーラいつまでもだだを捏ねてるとオクタくんに嫌われちゃうわよ」
「！…　わかった。またすぐに来てね。」

「わかった。バイバイクラーラ」
「うん・・・ バイバイ」

君は思い眠りにつく

クラーラに初めて会った日から一年が経った。今年で僕は、１５歳である。クラーラのお母さんに斡旋してもらった仕事は俗に言う何でも屋だった。そこで、僕は、町中を走り回ったり、料理を作ったり、鉱山に行ったり、流浪者やロボットと戦ったりした。そのおかげか僕の体に筋肉がついた。そこらへんの変な機械や流浪者なんかは僕の敵ではない。しかし最初の方は毎日死にかけたので、寝る時間を削り、知識をつけ、体を鍛えたのだ。

最近の町はなんだか物騒だ流浪者が鉱山から町に来て盗みを働いたり人を殺したりしているそうだ。そのため僕の元に仕事がたくさんきて、ここ数ヶ月はクラーラに会えない状態が続いていた。思わずクラーラの不貞腐れた姿が思い浮かんでしまい。心が暖かくなる。無理矢理にでも時間を作ってクラーラに会うことに決めた。

仕事が終わり帰路についていた。薄暗い路地裏に入ったあと少し先に人がいることに気づいた。嫌な予感がして急いで近寄ってよく見てみると。

クラーラだった

体中にには泥がついていて、綺麗な白髪が汚れている。大きな傷はないようだ。

「クラーラ！クラーラ！大丈夫か!?」

「すぐ病院に連れて行くからな頑張ってくれ！」

急いで医者のもとにクラーラを連れて行った。

「クラーラは大丈夫なんですか!?」

「落ち着いてください、低体温症とストレス、疲労からか気絶していますがまだ命には別状はありません」

安心したのか、頭が冷静になってきた。それにしてもどうしてクラーラはあんなとこにいたのか疑問が出てきた。

ーーーーー

私の幸せが壊れるのは一瞬だった。

「クラーラこれ運んでくれない？」
「いいよお母さん！」
「他には何か手伝うことはないかな？」
「ありがとうクラーラ。席についててまっててちょうだい。」
「うん！　」
「それにしても最近オクタくんこないなぁ」
　最近オクタ君は全然こない私のことなんか忘れちゃったのか不安になってしまう。
「クラーラは本当にオクタ君が好きなのね。」
「違うよっ！　オクタ君は私の友達なの！」
「あら、ごめんなさいね」
　お母さんはいじわるだ、確かにオクタ君は私の大事な友達なんだ。好きとは違うはず？
　少し考えてるとお母さんがご飯を運んできた。
「クラーラ考えているあなたも可愛いけどとりあえずご飯を食べましょう」
「うん！」
「「いただきます。」」
　私はスプーンでスープを口に運ぼうとしたら
　ドンドン
「？」
　家のドアを強く鳴らす音が聞こえる。
「クラーラちょっとまって「ドン」
　ドアが開きそこには男の人が来た。右手には銀色に輝くナイフを持って。男の人は直ぐに私たちのところにやってきた。
　お母さんは私を、守るように立った。
「クラーラ！逃げて！」
　お母さんが私に逃げてと言っているけど足が動かない。
「そんなに騒ぐな、親子共々すぐに、殺してやるよ。」
「クラーラ！」

「！」
足が動くようになって、玄関に続くドアを開けて部屋を出ようとしたん瞬間、後ろをみた。お母さんのお腹から血がたくさん出ていた。
お母さんは私の顔を見て、微笑んで、口を開く
「あなたにこの先目一杯の祝福を。さようなら」

そして気づいたら外にいた。
「うっ…っう…ごめんなさい、おかっ・・・ あっ…さん。」
涙がボロボロと出てきてが止まらない。鼻をすすっても悲しい気持ちはなくらない。
大好きなお母さんはもういない。もう自分の居場所はない。私の帰る場所はない。
最近家に来ない男の子が頭に浮かんだ。
「オクタ…くん」
意識はそこでなくなった。